

## 令和4年度せたがや学生ボランティアフォーラム

### ○開会

(若田部)

本日は、令和4年度せたがや学生ボランティアフォーラムにご参加いただき誠にありがとうございます。ただいまから始めさせていただきます。私は本日の司会を務めます昭和女子大学の若田部有夢（わかたべあゆ）と申します。よろしくお願いたします。本日のせたがや学生ボランティアフォーラムは、せたがや学生ネットワークのうちの取り組みの一つです。この取り組みは、学生と区の連携・協力によって、まちづくりを促進したり、大学生によるボランティア活動への区民の関心と理解を深めたりすることを目的として行っています。また、大学や世田谷区、ボランティア活動団体のそれぞれが、お互いの関係性を深めるためにも実施しています。

このせたがや学生ボランティアネットワークの中で、ふた月に1度程度、定期的な会議を行っております。5つの大学の中の複数の学生団体、世田谷区、世田谷ボランティア協会がオンライン上に集まり、活動についての意見交換や地域におけるボランティア情報の提供が行われています。この会議がきっかけで、実際に他大学同士がともに活動をしたり、区とボランティア協会がサポートをしながら、新たな活動にチャレンジしたりしています。

本日は、せたがや学生ボランティアフォーラムと題しまして、基調講演や活動事例の発表、パネルディスカッションを行います。この機会が、区民の皆様、世田谷区の私達学生の活動について理解を深めていただくこと、さらには世田谷区、地域の活性化へと繋がり、より一層、学生と世田谷区の皆様とが互いに協力し合える関係性を築くことができれば幸いです。

それでは、本日の流れを簡単にご案内いたします。この後、第一部としまして、昭和女子大学教授、渡辺様より、15分の予定でご講演をいただきます。第二部では60分間の予定で、学生ボランティア団体の活動発表をいたします。その後、10分間の休憩を挟みます。第三部では60分間の予定で、パネルディスカッションを実施いたします。また、本日は、事務局が記録のために写真撮影を実施いたしております。後方にて録画させていただき、後日、YouTubeの区公式

チャンネルせたがや動画にて配信させていただきますので、あらかじめご了承ください。参加者の皆様は、基本的に後ろから撮影させていただきますが、もし、写真に写りたくないという方がいらっしゃいましたら、後ほど、お近くの職員までお声がけください。

また、新型コロナウイルス感染症対策としまして、会場は定期的に換気を行っておりますので、ご了承ください。併せて、ソーシャルディスタンスの確保のため、お座席は間隔を空けてお座りいただきますよう、ご協力をお願いいたします。皆様のご協力をいただきながら、時間厳守で進めていきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

それでは早速、第一部を始めさせていただきますと思います。初めに、昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授で、コミュニティーサービスラーニングセンター長の渡辺剛（わたなべつよし）様より、ご講演をいただきます。それでは渡辺様、どうぞよろしく願いいたします。

## ○基調講演

（渡辺）

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科の教授、渡辺剛です。大学では、昭和女子大学コミュニティーサービスラーニングセンター長も務めています。今日は、「人はなぜボランティアをするのか。さあ、自分探しの旅に出かけよう」というタイトルで、15分間の基調講演をさせていただきます。よろしく願いいたします。こちらの方が、まずボランティア活動に参加した動機ということになります。少し文字が小さくて見えにくいですが、ちょっと見ていただきたいのですが、20%を超えてる項目をいくつか紹介していきたいと思いますが、まず1番目、「困ってる人の手助けがしたかったから」が、21.5%。そして、「地域をよりよくしたいから」が20.1%。こちらの方は、どちらかという和社会のためというようなスタンスで、ボランティア活動に参加しているのかなというふうに思います。それから下がっていきまして、「関心のある分野や社会問題の現場を見たかったから」が26.2%。そして、「楽しそうだったから」、一つ飛びまして、9番の「自分の成長につながると思ったから」が45.4%。さらに、その下のところですが、「活動分野に関する経験やスキルを得たかったから」、こ

こちらの4項目については、どちらかという自分のためにとということで、ボランティア活動をしているのかなというふうに思います。さらに下の方に25.8%というところがありますが、14番の「誰かの役に立ちたかったから」、それから17番の「所属する団体やサークル等の活動の一環だったから」が22.3%。こちらはどちらかという、社会のため、あるいは、人に誘われたからというようなところが動機になっているのかなというふうに思います。このように、ボランティア活動をする際に、まずは自分のためにやる活動、それから社会のためにやる活動、この二面性というのがあります。

ボランティア活動の動機の双方向性というふうにこちらの方ではまとめていますが、自分のために、左側の方ですけど、内発的動機、あるいは自分との出会いということ为目的に、ボランティア活動を行っている人、それから右側の方は社会のためにとということで、外発的な動機、そして他者との出会いを求めて、ボランティア活動をしている人というふうに分けられるのではないかと思います。ただ、どちらがすごい、素晴らしいということはありませんので、それから、どちらかに偏っているということもないと思いますので、両方含めながら、学生の皆さんはボランティア活動をやっているんじゃないかなというふうに思います。これを横軸としまして、個人、そして社会、内発的、外発的というのを横軸に分けました。それから縦軸の方は、上の方からいきますと、創造、能動的、それから下の方が学び、受容的というふうに分けてみました。そうしますと4つの事象に分かれていく訳なんですけど、まずは左側の方をご覧ください。ただきたいと思うんですけど、こちらは個人、自分のためにとという形でボランティア活動をする際ですが、その時にまずは学び、受容的な活動としては、どういうふうな内容があるのかということ、この内面を深め、後ほど話をします、自己効力感を高めたり、学びを目的に行動するということになります。それが少し、能動的に創造的な活動になってくると、左上になりますが、1番の個人の内面を演劇・美術・工芸・音楽・舞踊で自己表現するものという形に変わっていくというふうに考えます。そして、社会のために外発的の方を見てみますと、学びに関するところ、右下ということになりますが、人や社会の役に立つために、知識・経験・技術・労力を提供するというもの、これが創造的なものに変わっていくと。地域社会やグローバル社会をよりよく変革するために行動する

ということに変わっていくかと思います。この後、学生が、それぞれの活動を報告してもらいますが、どの辺りで活動しているのかということも、含めて、見ていただければというふうに思います。

ところで、ちょっと内容が変わりますが、マッチ売りの少女の物語です。少し物語を思い浮かべていただきたいと思いますのですが、このマッチ売りの少女が1本目にマッチをすった時に、見えてきた幻影とは何だったかということ、クイズ形式でちょっと聞いてみたいと思います。1番がおばあさん、2番がクリスマスツリー、3番がご馳走、4番がストーブ。それぞれ1回手を挙げてもらいたいと思いますので、この中で一番最初に幻影として見えたもの、一本目のマッチをすった時に、見えたものは何だったと思いますか。まずは、おばあさんだと思ふ人、手を挙げてください。何人かいますね。はい。クリスマスツリーだと思ふ人、手を挙げてください。はい。ご馳走だと思ふ人、手を挙げてください。多いですね。ストーブだと思ふ人、手を挙げてください。ストーブが一番多いですね。答えはですね、1本目をすった時はストーブです。後ほど話をしますが、やはり、マッチ売りの少女が厳しい状況に置かれていたというのは寒さということになりますので、マッチをすることによって、その暖かさの幻影を見るということ、それである程度、1本すったことで満足されて、2本目すった時は、もうお腹が空いてどうしようもないということで、ご馳走が出てくる。3本目にすった時には、クリスマスツリーが出てくる。そして4本目にすった時に優しかったおばあさんの顔が出てきて、おばあさんいなくなるという形で、残りのマッチをすっていったという、そういうふうな形になっています。ですから、おばあさんの顔が最初に浮かんだということで、手を挙げていた人がいましたけど、順番に下から欲求は満足されて満たして行って、最後におばあさんの顔というような形になります。

これと少し似たところになりますけど、「ヨースタイン・ゴルデル」という、「ソフィーの世界」というね、ノルウェーの小説家の方なんですけど、こちらの方にも同じような文章がありまして、「生きていくために一番大切なものは何でしょう？もし飢えている人がいたら、その答えは食べることですね。凍えている人がいたら、答えは暖かさです。一人ぼっちで寂しがっている人にたずねたしましょう。その答えは人との出会いです。」という文章があります。赤で書

いてあるところ、もう一度読みますと、「食べる」、それから「暖かさ」、「人との出会い」、このあたりが、生きていく中で一番大切なものになっていくのかなというふうに思います。マッチ売りの少女の場合は、一番厳しかったと言いますか、厳しい状況にあったのが、寒さということでしたので、暖かさということになったのかなと思います。

こちらの方をマズローの欲求の5段階説というふうなものに当てはめたとします。5段階説の方ですけど、一番下が「生理的欲求」、それから、その上が「安全欲求」、そして、その上が「所属と愛の欲求」、そして「承認欲求」、「自己実現欲求」ということになります。下の二つ「安全欲求」と「生理的欲求」は、「物質的欲求」と呼ばれることがあります。それから、上の三つは、「精神的欲求」というふうに呼ばれることがあります。さらに、下の「生理的欲求」から「承認欲求」までは「欠乏欲求」と呼ばれることがあります。そして一番上の「自己実現欲求」、こちらの方は「成長欲求」と呼ばれることがあります。こちらの方にマッチ売りの少女の状態を当てはめてみますと、「生理的欲求」が「ストロブ」、「ご馳走」、そして「安全欲求」が「クリスマスツリー」、そして、「所属と愛の欲求」が「おばあさんの顔」ということになります。先ほども言いましたが、マッチをすることによって、一つずつ満足していった上の段階に、上がっていくということになるわけですね。ですから、いきなりおばあさんの顔が出てきたら、こちらのマズローの欲求の5段階説に合っていないということで、ちょっと不自然な文章になっていたのかもしれない。さらに、この上の「承認欲求」、そして「自己実現欲求」、こちらの方を考えますと、ちょっと言葉の意味は、後ほど説明しますが、「承認欲求」のところが「持つ」ための生き方。肩書きであるとか、名誉であるとか、お金であるとか、そういうことを求める生き方。そして、さらにその上が「在る」ための生き方、「自己実現欲求」。自分の持っている能力を最大限に発揮して、世の中のために尽くしていくという、そういうふうな生き方というふうになります。そこで、こちらの方は「エーリッヒ・フロム」の「生きるということ」なんですけど、「持つ」ための生き方は、社会的地位や名誉、金銭、私有財産、学歴、肩書き、権力などの所有のために、ひたすら専念していく生き方で、そして、その上の段階が「在る」ための生き方で、限られた自己の能力を肯定的にとらえ、それを最大限に活かしながら、

生きることの喜びを獲得していく生き方ということになります。

それから、ここで自己効力感ということを少し話しておきたいと思います。自己肯定感の中の一つというふうに考えてもらえればよいのですが、課題に直面したときに、どうせもうできないというふうに諦めるのか、きっとできるというふうに思って頑張るのか、この辺が自己効力感の低い人が左側、私はダメ人間で人に嫌われている。勉強も仕事もできるはずがない。何をやってもまた失敗する。自己効力感が高い人は、私って結構イケてる人かもね、勉強も仕事も楽しい、何かにチャレンジしてみたい。こういうふうに自己効力感の高い人になるためには、やはり小さい成功の積み重ねが必要になってくるのかなというふうに思います。こちらの方がマルコスという16歳の男の子がいます、水泳を教えるボランティアをしました。そして、目の不自由な女の子、16歳がいます、水泳を教えてもらうボランティアをしました。その時に、必要としてくれる他者、意味ある他者へ、この場合は、目の不自由な女の子ということになるわけですが、その子を通して、必要とされている、必要としてくれる他者に必要とされている自分の姿を発見する。これが緑色の部分の自己同一性ということになるわけですが、これによって、少年は必要とされて、初めて大人になっていくのかなということです。

少しまとめの方に入っていきますが、意味ある自分と出会うということは、意味ある自分との出会いは意味ある他者との出会いから始まる。意味ある他者との出会いは「I need you」ということで、自分を必要としてくれる人のこと。多分、学生の皆さんは活動先の子どもであったり、あるいは高齢者の方であったり、障害を持った方、途上国の方ということが必要としてくれる人だということになると思いますが、このかけがえのない存在として自分を認めてくれる人・まち・地球と出会うこと、ボランティアは、ある意味、自分との出会いの旅ということになるかと思います。意味ある自分に出会うためにはどうすればいいのか、まず、1番目に、心の奥に潜む、必要とされたいという承認欲求、内発的動機に目を向ける。そして、2番目が、人は意味ある他者と出会うことで、意味ある自分を発見する。そして、3番目が、持つための生き方から在るための生き方を求めるということになります。言ってみたら、自分のためから、社会のために、他人のためにということになっていくのかなというふうに思いま

す。ボランティア活動をするには、どういうふうな意味があるのかということ  
で、私なりの話をしてきましたけど、さあ、自分探しの旅にですね、ぜひ出発  
してもらいたいというふうに思います。ボランティアの物語、自己効力感とか  
を高めるためには、小さな成功体験の積み重ねから育まれていくということ  
です。ぜひ勇気を持って、一歩踏み出してみてもらえればというふうに  
思います。以上で、私の講演を終わりにさせていただきます。ご清聴  
ありがとうございました。

(若田部)

渡辺様ありがとうございました。意味ある自分と出会う、意味ある他者と  
出会うということで、ボランティアの動機や、要求についての興味深いご講演  
ありがとうございました。皆様もボランティアを始めた頃の初心に帰れたの  
ではないかなと思います。

#### ○学生ボランティア団体の活動発表

(若田部)

続きまして、学生ボランティア団体の活動発表を始めます。それでは、国士  
館大学児童教育研究会さん、お願いします。

(国士館大学 児童教育研究会)

国士館大学児童教育研究会です。本日はお忙しい中、ご参加いただき、誠に  
ありがとうございます。私たちは、国士館大学の児童教育研究会という部活で、  
総員11名で活動しております。

まず、この児童教育研究会がどのような団体かと言いますと、国士館大学周  
辺の小学生を対象にして、イベントを開き、企画・運営をしております。企画・  
運営等は、全部員で話し合い、基本的に、一からの作業でやっています。イベ  
ントについては、「せたがやASOBO (あそぼ)」というイベントを行っており、国  
士館大学世田谷キャンパス周辺に暮らす小学生と工作や自分たちが考え、オリ  
ジナルで制作したゲームを、一緒にチャレンジして楽しんでもらうイベント  
です。現在は、第3回まで「せたがやASOBO (あそぼ)」を行っており、来年度に第  
4回目の「せたがやASOBO (あそぼ)」を検討しております。

また、イベントでの準備では、ポスターやちらしを一から考え、作成し、地

域の小学校、図書館、児童館のご協力のもとに配布させていただいたり、掲示板に掲載させていただいております。このように、私たち児童教育研究会は、部員が一丸となって、小学生が楽しめるイベントづくりを日々模索しながら、活動しております。もし、少しでも興味を持っていただけた方がいらっしゃいましたら、インスタグラム、ツイッターのアカウントのフォローを、よろしくお祈いします。もしよろしければ、今、スクリーンからフォローのほどよろしくお祈いします。

最後に、私たち児童教育研究会が日々こうして活動できるのには、皆様のご協力なしでは、決してなし得ません。これからも今までのように、皆様のお力をお借りできれば、これほど私達に心強いことはありません。以上で、国士館大学児童教育研究会の活動説明となります。本日は本当にお忙しい中、ご清聴ありがとうございました。

(若田部)

ありがとうございました。続きまして、駒沢大学ボランティアサークルさん、お祈いいたします。

(駒澤大学 駒沢大学ボランティアサークル)

こんにちは。駒沢大学ボランティアサークルです。よろしくお祈いします。これから駒沢大学ボランティアサークルについての説明を行います。本日はよろしくお祈いします。

駒ボラとは、駒沢大学ボランティアサークル、略して駒ボラです。駒ボラは世田谷区を中心に活動を行っています。活動は掲示板を見て、興味や関心を持ったものに自由に参加することができるという方針をとっております。そのため、趣味やバイトなど、自分のやりたいこととの両立をさせながら、ボランティア活動に参加することができるサークルとなっております。自分たちの活動のテーマにしてきたことは、地域の方々との交流です。新型コロナウイルスの流行によるイベントの減少など、年々、我々大学生のような若者と地域住民の方との関係が希薄化していることが問題であると考え、地元の方々と関わる活動を多く行ってきました。その中でも、今年度、特に力を入れてきた活動を三つ紹介いたします。

一つ目は、駒澤はらっぱプレーパークでの活動です。プレーパークとは、禁

止事項をなるべく設けず、焚き火や水遊びなど、子どもたちが自由にのびのび遊べる地域の遊び場のことです。現在、世田谷区内には4つのプレーパークが存在しており、また、資金は世田谷区が確保、運営はプレーパーカーと呼ばれるNPO法人プレーパーク世田谷の代表者の皆様と地域住民であるサポーターの皆様が担っています。我々は週に1度、駒澤はらっぱプレーパークへ出向き、サポーターとして、地域の子どもたちが安心して遊べる環境を提供する手助けができればと思い、公園内の設備の修繕や清掃などの公園整備を行いました。また、地域の子どもたちと良好な関係を構築するきっかけとして、プレーパークに遊びに来る、小学生の子どもたちと一緒に遊ぶことも大切にしています。プレーパークでは、季節ごとに様々な行事が企画されており、夏にはすべり台付きプールで子どもたちと一緒に水遊びをし、秋には野球もしたりしています。通常の遊びだけではなく、特別な環境でしかできない遊びを楽しむこと、子どもたちとの距離を近づけることで、子どもたちとより深い関係を構築することが可能であると考えています。

二つ目は、駒沢生活実習所への訪問です。駒沢生活実習所は、障害者の生活を支援し、社会生活における自立促進を促すことを目的とした福祉施設です。活動の内容は、重度の障害を持つ施設利用者の皆さんと交流することです。内容は、散歩の付き添いや創作活動のお手伝い、施設の掃除等を行ってきました。コロナ禍である今年はオンラインで紙芝居を読んだり、音楽を流して、軽いダンスをする等、交流を行ってきました。この活動を通して、普段関わることが少ない重度の障害を持つ方々に対しての理解を深めることができました。また、施設利用者さんとの交流に際して言語を通して以外の、身振り手振りでのコミュニケーションの取り方を学ぶ機会にもなり、我々学生にとっても大きな学びや経験を得られました。これからも障害を持たれる方との接し方や社会生活において抱える問題について、我々若者が理解を深めることで、障害を持つ方も暮らしやすい環境づくりをめざしていきたいと思えます。

三つ目は、弦巻児童館という、児童館での行事のお手伝いです。ここでは、児童の自主性やリーダーシップの成長を重視しているため、我々は子どもたちを見守り、相談に乗ってあげることを中心に、活動を行いました。初めは、我々大学生に対して緊張感や抵抗感を持っている子どもも多く見受けられました

が、児童館を何度か訪れるうちに心を開いてくれる子どもも増え、一緒になってイベントの行事を楽しんだり、逆に子どもの抱える悩みの相談を受けることで、お互いのことを理解することができ、この子どもたちが困った時に安心して相談できるような関係を築くことができたのではないかと思います。まだまだ関わり合いが十分ではないと考えており、今後とも参加を続けていきたいと思っております。

最後に、私たちの大学で行われたオータムフェスティバルの活動をお話したいと思います。オータムフェスティバルとは、今年の11月に行われた駒澤大学の学園祭のことです。オータムフェスティバルの期間、自分たちのサークルでは、子ども向けの企画として、スライムとプラバン作りや手づくりの輪投げ、ボーリングを行いました。一般のお客様を招いての学園祭の開催は2年ぶりだったのですが、家族連れや障害者施設の方など、小学生から大人まで、幅広い年齢層の方にお越しいただきました。その中には、先ほど発表いたしました活動の中で出会った地域の方々も多く、自分たちの活動が地域の人々の関わり合いを強く豊かにすることへ繋がっていたのだなと実感するとともに、今後とも、地域の人々の交流を通じて、お互いに支え合える地域づくりを目指していきたいと感じました。以上で、駒澤大学ボランティアサークルの発表を終了します。ご清聴ありがとうございました。

(若田部)

ありがとうございました。続きまして、駒澤大学学生赤十字奉仕団さん、お願いいたします。

(駒澤大学 駒澤大学学生赤十字奉仕団)

駒澤大学学生赤十字奉仕団です。これから活動発表を始めます。発表は2年の武井（たけい）と渡邊（わたなべ）が行います。よろしくお願ひします。この発表では、世田谷区との繋がりをお話した後、各活動の紹介を行います。

まずは当団と世田谷区との繋がりで。今までは繋がりが非常に薄かったのですが、これには2点の理由があります。まず、駒澤大学には本日参加していらっしゃるボランティアサークルさんをはじめ、複数のボランティアサークルがあります。他のサークルでは、子どもたちと遊ぶ、ごみ拾いを行うなどの活動を行っているので、他のサークルとの活動をすみ分けるということから、今ま

で繋がりがなかったと考えられます。さらに活動は赤十字関連のものも含まれます。これらの活動は、行政の方と関わる機会が多くありません。この2点の理由から、今まで地域に根差した活動がありませんでした。そのような時に、せたがや学生ボランティアネットワークへ参加しないかというお声掛けをいただきました。他大学のサークルの方々と連携を深められ、かつ地域課題の解決にもなるのではないかという考えから、参加を決めました。以上の経緯から、当団はこれから世田谷区との繋がりを深める段階です。今後、地域課題の解決にも貢献できればと考えております。

ここからは、当団の活動を紹介します。先ほど申し上げましたが、これから世田谷区との繋がりを深めていく段階ですので、紹介する活動は世田谷区との繋がりが無い活動も含まれます。ご了承ください。

まずは献推連についてです。献推連の正式名称は東京都学生献血推進連盟といます。近年、私達と同年代の方の献血が減少しています。献血には年齢制限があり、かつ、血液は人工的に作ることはできません。そこで、若い人の献血を同世代の立場から推進するため、大学生が活動を行っているのが、献推連です。献推連の主な活動としては、赤羽や自由が丘などの駅前での呼びかけ、また献血セミナー等を開催しており、私たちはこの活動において、呼びかけなどを主に行っております。活動の効果といたしましては、大学生が呼びかけを行うことで、同年代の方たちが通常に比べ、より献血に協力していただけるのではないかと考えております。この写真は活動の様子です。

次は東京マラソンのボランティアです。東京マラソン当日、ランナーの皆様の整理、給水等を行います。このボランティアは人気であり、抽選で決まるそうです。来年度も当団のメンバーは参加したいと考えていますが、抽選に外れると参加することができないため、抽選を通過することを祈っております。

続いて、学内献血です。コロナ禍以降、実施することができていませんが、コロナ禍前は年に2度実施しておりました。この活動の効果といたしましては、在学生の呼びかけを行うことにより、先ほど述べさせていただきました通り、若年層の協力が増えるのではないかと考えております。

次は、子供の家について紹介させていただきます。この活動はコロナ禍で活動が停止してしまっているため、写真なしで発表させていただきます。赤十字

子供の家という児童養護施設の子どもたちと交流を行っております。

最後に、スライドにはありませんが、地域と結びつく活動の一つお話しします。世田谷ボランティア協会さんや世田谷区の職員の方々にもサポートで入っているオリーブルームという活動です。この活動は、本日フォーラムに参加していらっしゃる昭和女子大学のENVO（エンボ）さんとともに行っています。地域の子どもたちと遊んだり、宿題等の勉強を一緒に行います。勉強を行う際には、手取り足取り教えるのではなく、見守ることを大事にしています。この活動は11月から始めたため、成果があらわれるのはもう少し先のこととなります。

以上が私たち駒澤大学学生赤十字奉仕団の活動です。これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

（若田部）

ありがとうございました。続きまして、昭和女子大学ENVO（エンボ）さんお願いいたします。

（昭和女子大学 昭和女子大学ENVO（エンボ））

これから、昭和女子大学ENVO（エンボ）の活動内容について発表します。よろしくお祈りします。先ほどタイトルに見えないアルファベットの並びがありませんでしたか。こちらエンボと読みます。私たちの団体名です。その由来は、エンジョイボランティアから来ています。私たちは、学生ボランティアコーディネーター団体として2009年に発足し、学内のコミュニティサービスラーニングセンターと協力しながら、学生によるボランティア活動がより参加しやすいものになるように、日々活動しています。これまでは、東日本大震災当時から10年以上続く、宮城県でのワークキャンプや長野県、海外はタイにまで学生が足を運び、地方での現地交流がメインの活動でした。地方での活動は、目に映るものすべてが新鮮で、大学生活の一番の思い出と言っても過言ではないほどのものでした。

しかし、地方での活動を行う中で、昭和女子大学のある、世田谷区内で活動できる機会が少ないよね、という声が常々挙がっているのも、事実でした。世田谷区に住んでいる学生ばかりではありませんし、以前、ワークキャンプに参加した宮城県や長野県の地域がそうであったように、この際、勉強のために通

っている世田谷区が第2のふるさとになったら素敵だなとも感じました。そこで、私たちが学ぶ世田谷区について知ろうと思い、この場を借りて、区の地域課題と、それらの解決に向けて私たちENVO（エンボ）にできることについて、考えてみることにしたのです。すると、主にこの3つが挙げられました。なかでも、3つ目の、学生と地域との繋がりや薄さは私たちENVO（エンボ）の課題でもあります。例年、宮城県や長野県等、遠方でのワークキャンプがメインの活動だったこともあり、大学が所在する世田谷区で、地域の方々とかかわるチャンスを、まさに今探しているところです。

そんな中、本日のフォーラム参加のきっかけとなった、せたがやネットワーク会議への参加を始めとし、昭和女子大学の学生にボランティアを身近に感じてもらうため、社会福祉協議会様や世田谷ボランティア協会様にご協力いただいている、「セタガヤ企画」等、少しずつではありますが、区内での活動を増やすことができている。なかでも、せたがやネットワーク会議への参加は、他大学の活動について知ることができたり、素朴な悩みを交換し合ったり、コロナ禍でありながらも、同年代の皆さんと交流できる貴重な機会です。実際に、せたがやネットワーク会議が始まって以来、今、初めて、こうして会えていること、皆さんと一緒に、このフォーラムを運営し、参加できていることが、本当にうれしいことだと感じています。さらには、ネットワーク会議内でご提案をいただいて、新たに発足した学習支援ボランティアの活動に、駒澤大学赤十字奉仕団さんと一緒に参加することもできています。同年代の学生同士で、ともに試行錯誤しながら活動できる機会は、ENVO（エンボ）として、久しぶりなことでもあり、とても刺激的で、日々充実しています。このような活動は、大学生が世田谷区内で活動範囲を広げる第一歩目につながったり、地域の子どもたちやお年寄りの方々と関わりをもつことで、お互いの生活にハリが出たり、よい効果がたくさん生まれていると感じます。また、せたがやネットワーク会議のように世田谷区役所の方々、せたがやボランティア協会の方々に顔を覚えてもらえたり、他大学同士がつながったりと、個人対個人だけではなく、機関対機関が深く結びつくきっかけにもなっているのではないかと考えます。こうして、地域での活動を継続することができれば、世田谷区民と学生とが、お互いを身近な存在として認識できるのではないのでしょうか。

最後に、昭和女子大学ENVO（エンボ）の今後の展望としては、まず、これまでに挙げた世田谷区での活動を、継続していきたいと考えています。対面で会える機会が限られる中ではありますが、今回のせたがや学生フォーラムへの参加がそうであったように、まずは団体内での他学年との交流、そしてボランティア活動の機会の周知に力を入れ、たとえメンバーが入れ替わったとしても、同じ活動に、5年、10年と関わり続けることが目標です。そうした結果、世田谷区に住む地域の方々と、昭和女子大学の学生とが互いに心地よい関係性を築くこと、その姿を見かけたら、ホッと心が温かくなるような顔見知りになればいいなと考えています。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

（若田部）

ありがとうございました。続きまして、日本大学文理学部学生国際ボランティアグループSalamat” A”（サラマツトエー）さんお願いいたします。

（日本大学文理学部 日本大学文理学部学生国際ボランティアグループ Salamat” A”（サラマツトエー））

皆さん、こんにちは。日本大学文理学部学生国際ボランティアグループ Salamat” A”（サラマツトエー）と申します。よろしく申し上げます。それでは、活動紹介を始めていきたいと思えます。よろしく申し上げます。

まずサラマツトという団体は、きっかけといたしましては、とある1人のフィリピンの小学生を支援することから始まりまして、そこからかれこれ15年以上続いている団体でございます。現時点でメンバーは9名ほど所属しております。主にフィリピンの子どもたちの教育支援をしている団体で、奨学金支援、文房具やぬいぐるみ等の物品支援、そしてフェアトレード商品の買い付け、鳥取県のお野菜の販売等を行っています。この後、詳しく説明していきます。

次にSalamat” A”（サラマツトエー）という名前の由来ですね、まずこのサラマツトって結構、多分聞きなじみないと思うんですけども、これはフィリピンの現地の第一言語でタガログ語という言語がありまして、そこでありがとうという意味があります。この” A”（エー）というのは、サラマツトの活動理念であるアドバンス、アクティブ、アドバンテージ、日本語のありがとうというコメント4つの意味を持った” A”（エー）となっております。

活動紹介に行きますね。まず奨学金支援ですね。私たちは地域のイベント運営のお手伝い等によって、お手伝い費だったり、あとはそのイベントのカフェ運営などで利益を出すことでお金を集めています。このお金をどうするかと言いますと、そのすべてを集めて、フィリピンの僕たちが支援している大学生の方に送金します。主なイベントを挙げますと、夏祭り、桜まつり、ハロウィンイベント、フリーマーケットですね。主な活動場所としては、代官山、幡ヶ谷、桜上水、下高井戸等々があります。

次に、フェアトレードアクセサリーの販売です。このフェアトレードアクセサリーという言葉は、あまり聞きなじみがないと思いますが、何かといいますと、実際に、フィピンのお母様方が手づくりしたアクセサリーを現地へ行って、それを公正な値段で買い取って、国内に持ち帰って、それをまた同じ値段プラス寄附金の分を上乗せして販売する。その販売した利益がすべてそのままフィピンのお母様方へ還元するという、公正公平のもとで行っているフェアトレードアクセサリーです。こちらの利益を出すことで、家庭を潤し、子どもが学校に行ける環境を作ることができます。ここで、軽くクイズをしていきたいと思います。この一番下の可愛いバラのアクセサリーがありますが、これは、一体何でできているのでしょうか、というのをちょっとクイズ形式で聞いていきたいと思います。まず1番、ダンボールだと思う人。ありがとうございます。2番、雑誌だと思う人、手を挙げてください。多いですね。ありがとうございます。では3番、これはガラスだと思う人、手を挙げてください。ありがとうございます。4番、本物の花。ありがとうございます。最後に、ティッシュペーパーだと思う人、手を挙げてください。ありがとうございます。これ実は、雑誌なんです。結構、雑誌がカラフルでして、それを綺麗にこういうふうバラの形にまとめて販売しております。ちょっとSDGsに貢献しているという、お話でした。失礼しました。次はですね、物品支援でございます。やっぱり、フィリピンの物品が不足しており、文房具やリコーダー、鍵盤ハーモニカなどを国内で集め、寄附で募って、それを段ボールで送付しております。主に集めている物品は、4つほどで、ぬいぐるみ、文房具、絵本、楽器です。主にこの絵本、楽器ですね、こちらは皆さん使ってらっしゃいますので、このように、1回寄附してもらってから、丁寧に洗ったりして、フィピンに送っております。また、

この絵本ですね、日本の絵本を寄附で募りまして、それを僕らが頑張って英訳して、フィリピンに送っております。

次はですね、幡ヶ谷での販売。毎週土曜日に幡ヶ谷にて鳥取県の減農薬の野菜や果物、加工品を販売しています。この売っている場所、このスライドの写真になりますが、八頭町という鳥取県のある町でして、そこの農家さんから直接発注した、食材が主に店頭並びます。この売り上げの一部、もしくは半分が支援に繋がっております。ちなみにどうしてこの八頭町のお野菜を販売してるんですかね。これは八頭町アドバイザーという肩書きを持った山田さんという方がいるんですけれども、そちらの紹介でお野菜を売ってみたらどうだということで、鳥取県の町の方とつないでいただきまして、この幡ヶ谷という場所でお野菜を売り始めたというのがきっかけでございます。この間ですね、実際どういう人が作っているんだろうとか、どういう地域なんだろうっていうのを視察するために、僕らがイベントとして鳥取研修というものを行っております。これは10月の初旬ですね、2泊3日のツアー行程でして、実際に農家さんに会ったりとか、どういうふう野菜を作っているのかとかを見ることで、例えば販売時にお客様からどういうふう食べるのか、どうやって作っていると聞かれた時に、答えられるようにするという目的でございます。そして、こちらがその海外版のフィリピンスタディーツアーです。こちらは僕たちがフィリピンを支援してるわけですが、じゃあなんで支援しているのかとか、一体どういう人たちを支援するかとか、フィリピンの現状ってどういうものかというのを周知してもらうために、1週間弱、フィリピンの方に行きまして、まずはこのように、マニラの観光や、日本がフィリピンにってしまったこととか、そのフィリピンの歴史を学んだ上で、こういうふう支援地域に行きまして、こういうふうタガログ語で劇を行ったり、文房具を配ったり、こちらの奨学生、大学生との交流をしたりしています。今、実際にフィリピンに何が必要かとか、これから私たちがどう支援していくかという反省会をここでしております。以上です。ここからコロナ禍での活動について、石田の方から説明させていただきます。よろしくお願いします。

よろしくお願いします。私達サラマットでは、こういった海外との交流を行っているのですが、特にこの2020年から始まった新型コロナウイルスというものに

は非常に大打撃を受けてしまいまして、様々な活動が中止になってしまいました。ですが、それでもできることはあるということで、こういったフィリピンの方々と実際にこういったZoomで交流を図ったり、あとは鳥取県の農家さんと、下のようにミーティングみたいなことを行ったりして活動や、交流を保っているという形になっています。

次に、これから私たちがコロナ禍でやっていきたいことなんですが、まず、最近では、withコロナというものが始まって、イベントもしっかりとどんな形でも再開していきたいと思っています。そして次に、こういう時代ですので、先ほど言ったフェアトレードのアクセサリ等をオンラインで販売していけたらいいなということで、オンラインショップを活用して販売を広めていけたらなと思っています。最後にこういった、先ほど言った八頭町の紹介映像等を作ることによって、私たちの活動も一緒に広めていきたいと思っています。本日はご清聴ありがとうございました。もっと詳しく知りたい方がいましたら、こちらのフェイスブックやインスタグラム、ツイッター等でDMを送っていただければ、丁寧にお答えしますので、よろしくお願いします。本日はありがとうございました。

(若田部)

ありがとうございました。続きまして、明治大学きずなInternationalさんお願いいたします。

(明治大学 きずなInternational)

こんにちは。私たちはきずなInternationalと申します。これから私たちの活動の一つである、うめ・ゆめふれあい塾について発表させていただきます。よろしくをお願いいたします。本日発表を務めさせていただきます、きずなInternational2年の平松華絵（ひらまつかえ）と申します。1年の日坂健人（にっさかけんと）と申します。まず、簡単に私たちきずなInternationalの活動について、ご紹介させていただきます。私たちは明治大学の公認ボランティアサークルです。もともとは宮城県南三陸町の復興支援のために設立されましたが、近年はコロナ等の事情により、首都圏での活動に移行しております。今年で12年目を迎えており、現在、約160名ほどの部員が所属しております。

まず、うめ・ゆめふれあい塾の開催のきっかけとなった、うめ・ゆめ子ども

食堂についてご紹介いたします。うめ・ゆめ子ども食堂は、NPO法人子育てねっとSukuSuku様、梅丘商店街をはじめとする方々の活動で、きずなInternationalもスタッフとして、こちらの活動に参加させていただくことになりました。こちらの参加には、世田谷区役所や世田谷ボランティア協会の方々にもご協力いただいております。うめ・ゆめ子ども食堂のこれまでの活動として、活動会場である梅丘ボランティアビューローの清掃であったり、お弁当配り等を行っております。しかし、コロナ感染対策の観点から、子ども食堂の開催が難しい状況が続いております。

そこで、今年6月に学生の中で、学習支援であれば始められるのではないかという声が上がりました。学習支援をする意義として、以下の二つを考えております。一つ目にうめ・ゆめ子ども食堂を開催するにあたって、その宣伝になること。二つ目に、子どもたちに楽しんで参加できるような居場所を作り、大人よりも距離感の近い大学生が小学生と関わることで、新たに繋がりが生まれるのではないかということです。そして、梅丘周辺に住む小学生を対象とし、学習とレクリエーションを行う、うめ・ゆめふれあい塾を企画しました。こちらでも子育てねっとSukuSuku様が主催で、梅丘商店街、世田谷区役所、世田谷ボランティア協会の方々にご協力をいただいております。梅丘ボランティアビューローにて毎月第3土曜日に実施しております。本日で5回目の開催を無事に終えることができました。次にちらしについてです。毎回このようなちらしを作成し、保護者の方に入っているライングループに共有したり、現在では山崎小学校、城山小学校に配布をお願いしています。次に、こちらは実際の活動の様子です。このような感じで実施しています。大体9人くらいの方が参加して下さいます。次に、こちらはレクの様子になります。私たち大学生も小学生のみんなと一緒に遊んでいます。折り紙や、なぞなぞなどのレクリエーションを実施しており、楽しんでくれる姿にいつも心が温まる次第であります。今後の展開についてです。今のところ、口コミによって活動が広がっております。大変ありがたいことではありますが、新規の小学生にも来てもらえるよう、宣伝にさらに力を入れていきたいと思っています。今後も継続的に企画して、子どもたちとさらに関係を深めていきたいと思っています。最後になりましたが、最近、インスタグラムの方を始めました。よろしければフォローをお願い

いたします。以上で発表終わります。ご清聴ありがとうございました。

(若田部)

ありがとうございました。続きまして、明治大学心身障害者福祉会しいの実さん、お願いいたします。

(明治大学 心身障害者福祉会しいの実)

皆さんこんにちは。僕たちは明治大学の心身障害者福祉会しいの実っていうサークルです。こんな貴重な活動発表の機会をいただいて、ありがとうございます。坂本璃空（さかもとりく）と庭山大毅（にわやまだいき）の2人で発表していきたいと思います。よろしくお願ひします。はい。しいの実ですけど、特徴としてさっきの駒ボラさんにちょっと近いかなと思うのですが、複数の活動先がありまして、学生たちは、大学に入ってからそれぞれ自分のお気に入りの活動先を見つけて、そこに入って、集中的に関わっていくみたいな、そういうシステムになっています。だから、活動先がいくつかありますが、今回最初にお題をいただいていて、どんな地域課題があって、しいの実の普段の取り組みが、どう影響して、地域にどういう影響があるのかっていうのをお話ししていければと思います。まず、これは荻窪中学校っていう活動先ですけど、ここは中学生が対象で、中学生は勉強しなきゃいけないのはもちろんですけど、自分の将来についても、だんだん小学校から成長して、そういうことを考える時期だと思うんですけど、そこに大学生がお手伝いっていう形で放課後に実習をする中学生の生徒さんを、見守って、声をかけたりするっていう活動をしていて、他に、荻窪中学校以外にも、向陽中学校とか小学校になりますけど、高井戸小学校とかそういうところでも、放課後の学習の見守り活動というのはやっています。地域への影響というか、中学生たちにどんないいことがあるかということですけど、大学生と交流するというのは、中学生と同世代でもないし、かといって先生とか親みたいに、年齢が離れすぎているというわけでもなくて、中学生が自分の近い将来について考える、何かそういうロールモデルに大学生がなっているので、そういう意味ではいいのかなということと、あと他の大学の学生と一緒に活動するというところで、大学生にとっても、そういう交流の機会になって地域の理解が深まったりするという影響があるかなと思います。

次の活動はぎんなん会というところですけど、ここは学校ではなく、知的障

害の方を対象とした活動で、養護学校を卒業した後の障害者の方の居場所というのを、これはありそうで、なかなかないので、そこを一緒に活動して作っていかうという感じです。普段は缶つぶしと言ってですね、空き缶を機械に入れてガチャンと潰して、一緒に帰るといふ、ルーティンがありますけど、それを一緒にやって、活動後に一緒におやつを食べることも、最近は増えてきました。この間、会員さんと一緒に山梨に合宿も行ってきて、僕たち2人はですね、この活動先を選んでいきますけれど、影響としては、僕たちその知的障害者の方のことを会員さんと呼んでいるんですけど、会員さんにとっては、養護学校を卒業した後も、仲間と集まって一緒に過ごすという場所ができるという、そういう場所が地域にできるというのが、いいことかなと思います。僕たち学生にとっての学びは、さっきも他の団体さんも仰っていたと思いますが、コミュニケーションの取り方が、やっぱり障害を持っている方と持っていない方で異なり、障害を持っていない方になら、普通に伝わることでも障害を持っている方に伝えようと思うとなかなか難しいところがあるので、自分のコミュニケーションの取り方というか、自分の伝えたいことを相手にどう伝えるかという、そういうのを改めて考えたり、工夫し直したりするという、いいきっかけになっているかなと思います。

これは永福小学校で、ここから2つは、小学校で子ども向けの活動ですけど、永福小学校は、放課後の小学校で、それぞれ違う家庭環境で暮らしている子どもたちで自主的に放課後に遊びに行っている子もいるし、親御さんが働いているから、帰ってくるまで迎えを待っているという子もいて、その子たちと大学生と一緒に遊んだり安全を見守ったりするという形で、ここでも、やっぱり大学生なので、立場は先生かもしれないけれど、あくまで同じ目線に立って、関わるということ意識しているというふうに責任者の方が言っていました。さっきも言いましたが、子ども、同世代でもなければ、親御さんとか、指導員とか、地域の人たちという、大人でもない、大学生という結構、特殊なポジションだと思うのですが、その大学生が間に入ると、この3つの間で、より円滑なコミュニケーションが生まれて、結構、活発な活動に繋がっているのかなというのがあります。

次も似たような感じになりますが、済美小学校というところですけど、ここ

は放課後の小学生たちの居場所を確保するという目的で、掃除と宿題とかを手伝ったり、あと、室内遊びとか、外遊びを一緒にするという、ここの特徴は、小学校と児童館がそれぞれ分かれているんですけど、その小学校の体育館の中とか、その施設の中を子どもたちが自由に使えて、自由に遊ぶ環境が整っているということかなと思います。

最後は、F.C.エレキングですけど、ここは電動車椅子サッカーのチームの名前がF.C.エレキングと言って、もともと取り組めるスポーツが限られていたり、コミュニティが限られていたんですけど、そこに大学生がチームスタッフとして入って、手動の車椅子でチームの人と対戦したりするんですけど、チームの方々にとってはスポーツに励むという機会ができるし、仲間をたくさんできるというふうに良い機会があって、学生のスタッフにとっては選手たちをサポートしながら、その活動のコミュニティを自分たちで、大学生の立場を生かして広げるということに貢献できているかなと思います。こういうふうにたくさん活動がありますが、僕たちはそこから、お気に入りの1つを選んで、ずっと関わっているという形になります。長くなってしまいましたが、これでいいの  
実の活動発表を終わりたいと思います。ありがとうございました。

(若田部)

ありがとうございました。続きまして、最後の団体発表となります。明治大学ぱれっとさんお願いいたします。

(明治大学ぱれっと)

こんにちは。それでは、よろしく申し上げます。明治大学環境系ボランティアサークルのぱれっとと申します。目次で、まず、ぱれっととは、ごみ拾い活動、エコキャップ回収活動、児童館での活動、Table For Two、コロナ禍以前に行っていた活動、コロナ禍で模索した活動、最後に、ぱれっとの振り返りと今後の展望をお話しさせていただきます。

まず、ぱれっととは、明治大学の環境系ボランティアサークルで、部員数はおおよそ60名ほどです。そして、ごみ拾い活動を中心にエコキャップ回収や児童館アルバイト等の活動も行っております。

そして、僕らのメインの活動である、ごみ拾い活動ですが、目的は、まちの美化への貢献、また自他のごみに対する意識改善を目的として行っております。

これは、月に3回ほど昼休みの時間に実施しており、1回の活動の参加者は10名から20名ほどで、参加者同士の交流も楽しめる、参加しやすく継続しやすいボランティアです。内容は、大学近辺の道のごみを分別しながら拾うというもので、可燃ごみ、不燃ごみ、ペットボトル、ビン、缶に分けて回収活動を行っております。また、回収したごみ袋は、大学の倉庫に保管した後、大学提携の業者によって引き取られます。

次に、エコキャップ回収活動について説明します。エコキャップ回収活動の目的は、途上国の子どもたちのワクチンのためにエコキャップを回収して、そこでたまった資金で、発展途上国の子どもたちに寄附するというもので、これはキャップがたまり次第、不定期で実施しております。1回の参加者は10名から20名ほどとなっております。エコキャップ回収活動の内容は、複数のグループに分かれて、大学構内に点在するエコキャップ回収箱から中身を回収するというもので、回収した後はエコキャップの点検、仕分けをします。倉庫に一旦保管した後に、回収業者に引き渡します。業者によって、エコキャップは売却され、その利益がワクチンの製造費となります。

次に児童館での活動ですが、児童館では児童館のお仕事を手伝いながら、子どもたちと交流するといったものを行っておりまして、西荻南児童館での児童館アルバイトとして、春休み、夏休み、年始の時期に行われます。また、ハロウィンや縁日などのイベントも、お手伝いさせていただいています。基本的に参加者は5名から10名ほどです。児童館では、子どもたちが、けがをしないように見守りをしたり、カードゲームやボードゲームで一緒に遊んだりします。

次に、コロナ禍になってできていなかった活動の一つのTable For Twoについて、今年再開できたので、説明します。こちらのTable For Twoという活動は、先進国の肥満という問題と、発展途上国の飢餓の問題を同時に解決したいということで、こちらのメニューを大学の食堂で販売して、その売上金を、発展途上国の方に寄附させていただくという活動になっております。こちらは大学が、食堂の方にご協力いただきまして、ぱれっとでは、そのメニューの考案と販売促進を行いました。

先ほどのTable For Two以外にも、コロナ禍でできなくなったけれど、その前にできていた活動を紹介します。まず、エコライフフェアで、毎年6月ごろに開

催される環境系イベントでブース出展に向けた企画や小物作成、運営などをしていました。次にスワンベーカーリーというものがあまして、スワンベーカーリーでは、障害を持つ方々が運営するパン屋さんのことで、複数のボランティアサークルと合同で、第一校舎にてパンの販売を手伝っておりました。また、ecoどもという活動で、明大祭の期間に、子どもたちを招いてeco運動会という、環境系のクイズと運動を合わせた企画を行っておりました。

また、コロナ禍で模索した活動では、いろいろなオンライン活動を行い、環境クイズを、Zoomを使ってやったり、環境かるた作りというものも、Zoomを通して、児童館の子どもたち向けに、環境をテーマにした、かるたを作成したりしていました。

最後に、ぱれっとの振り返りと今後の展望をお話します。2021年度ではサークル内でのごみ拾いとエコキャップ活動、活動の現状を維持することが中心でした。しかし、2022年度では、コロナによる規制が緩和したことにより、他のサークルや団体との交流会や会議、共同企画が実施できたのに加え、以前に行っていた活動を再開できました。この流れで、新たな団体と共同企画を行ったり、昔、行っていた企画や新しい企画を実施していきたいと考えております。以上でぱれっとの発表を終わりにします。ありがとうございました。

(若田部)

ありがとうございました。各団体発表者の皆様、素敵な発表をありがとうございました。同じ世田谷区で学ぶ学生たちがそれぞれ、国内外、様々なところで、個性溢れる活動をされているというところで、大変興味深い発表でございました。ここで十分程度、休憩といたします。15時30分に再開いたしますので、それまでにお席にお戻りいただきますようお願いいたします。

## ○パネルディスカッション

(若田部)

続きまして、パネルディスカッションを始めます。それでは、ここからの進行は第一部にてご講演いただきました渡辺様をお願いいたします。

(渡辺)

それでは、ただいまからパネルディスカッションを開催いたします。パネル

ディスカッションのファシリテーターを務めます、昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授の渡辺です。どうぞよろしくお願いいたします。まず初めに、パネリストの方に簡単にそれぞれ自己紹介をお願いしたいと思います。自己紹介の内容としましては、自己紹介、そして団体紹介、団体での役割、活動を始めたきっかけ、活動をしたと思った理由などを簡単に述べていただければというふうに思います。それでは、まず、大高（おおたか）さんからよろしくお願いいたします。

（大高）

国土館大学児童教育研究会の大高です。活動紹介ですけれども、児童教育研究会では、学生が作成したゲームや劇、子どもたちに楽しんでもらうボランティア、イベントを年に大体3回ほど行っております。普段はそのイベントに向けて準備しております。活動を始めたきっかけですけれども、私はこの部活に入って、子どもを含めて人と関わることがとても好きで、学生生活を通してたくさんの人と関わりたいと考えていたので、ツイッターやインスタグラムなどのSNSを通して、まず第1印象として楽しそうだなあと思いまして、そこに活動している先輩方の様子を見て、入部を決断しました。また部活の活動が、子どもたちにとって楽しい思い出の一つとなるように、どうしたらより楽しんでもらえるかを考えることや、活動としてどのような経験ができるかを試してみたかったという好奇心もあります。以上です。

（渡辺）

はい。ありがとうございました。それでは伊藤（いとう）さん引き続きお願いいたします。

（伊藤）

こんにちは。駒澤大学ボランティアサークルの伊藤光佑（いとうこうすけ）です。よろしくお願いいたします。私たちの団体ですが、私たちの団体が行っていることとしては、先ほどあったように、高齢者施設、障害者施設、児童施設等、様々な幅広い年代の方を対象に、福祉的なボランティアを普段、行っております。団体としての役割は、そういった困った人々たちとの交流や、助け合い、そして幅広い年代のコミュニティの活性化を図っております。活動を始めたきっかけとして、私自身が悩んでいることが、社会福祉を勉強しており、そうい

った直接的にボランティアができて、より学びを深められたらなと思って、ボランティアサークルで活動をしました。活動をしたと思った理由としては、さっきとかぶってしまうのですが、その社会福祉を学んでいく上で、実践的に感謝されたりとか、そういった社会福祉の学びの増進で、社会福祉の直接的な面白さを知りたいと思い、ボランティアサークルに参加しております。以上で自己紹介を終わりたいと思います。

(渡辺)

ありがとうございました。それでは田畑（たばた）さんお願いします。

(田畑)

駒澤大学学生赤十字奉仕団の田畑雅明（たばたまさあき）と申します。団体の紹介としましては、先ほどもありましたように、赤十字関連の活動、いわゆる献血推進の活動ですとか、あるいは、赤十字は関わっていない活動、学習支援であったり、車椅子生活を送られている生徒さんたちとの交流などを行っています。団体での役割として、私は代表を務めています。活動を始めたきっかけとしましては、私自身ずっと中学とか高校でボランティアとかに関心があったのですが、なかなか部活もボランティアの部活とかがなかったのもので、それで大学ではボランティアをやりたいなと思って活動を始めました。活動したい理由としては、これも先ほどとかぶってしまうのですけれども、ボランティアがやりたかったことと、あとはこの駒澤大学学生赤十字奉仕団が、規模としてはそこまで大きくなかったのですね、今もそうなのですけれども、大体50名前後なので、団員一人一人の顔も覚えられるだろうなと思って、また、活動も伸び伸びできるなと考えて、この活動を選びました。以上で紹介を終わります。よろしくお願いします。

(渡辺)

ありがとうございました。続きまして山下（やました）さんお願いします。

(山下)

昭和女子大学ENVO（エンボ）に所属している山下（やました）と申します。ENVO（エンボ）は先ほども紹介がありましたけど、基本的に4つのチームに分かれてそれぞれのコンセプトに沿って活動しています。私は現在コミュニティチームのキャップを務めさせていただいて、今ちょっとコロナで活動が制限

されていることも多いですけれども、女川町の震災で被害を受けた女川町の方々との活動とか、あとは三軒茶屋に校舎を構えている青鳥特別支援学校さんが運営するカフェで使用するシールのデザインとか、メニューデザインを主に活動しています。活動の目標としては、先ほど渡辺先生からお話があった、その創造か学びか、社会か個人かっていうお話のところでは、そうですね、学生が主体的に動いて、学びを経て、その学びで出たことを社会に提供できたらいいのかなと思って、やっぱり学びのところに全体的に焦点を当てていければいいのかなと思っています。活動を始めたきっかけとしては、私自身やっぱりコロナで何もできなかったのが、活動が、何かしたいなと思って始めたのが、きっかけで、私は主に震災で被害を受けた女川町さんとの活動に興味を持って、活動することを決めさせていただきました。本日はよろしく願いいたします。

(渡辺)

ありがとうございました。それでは石田（いしだ）さん、お願いします。

(石田)

日本大学文理学部学生国際ボランティアグループSalamat” A”（サラマツエー）の石田と申します。本日はよろしく願いいたします。私たちの団体は、フィリピンの子どもたちへの教育支援ということを主に活動の目的としているので、他の皆さん方と少し毛色が違うのですが、今、団体では、コロナでいろいろすべての活動が中止になってしまったので、その復旧ですとか、あと新しくオンラインでの活動などを広げていきたいと思っています。自分が活動を始めたきっかけはもう単純にゼミで先輩に、ちょっとお昼来てみないかみたいな感じで誘われたのがきっかけで、その上で説明を聞いて活動したいなと思った理由が、他のボランティアだと何か自分が勝手に支援するみたいな感じなんですけど、どちらかというところこのサラマツエーという団体が双方向の支援で、支援される側も一緒に協力してというものだったので、何か非常に現代的というか、面白い活動内容だなと思ったので、単純に興味を持ったので行ったという形になっています。現在もこういうふうに活動を続けているという形になっています。本日はよろしく願いいたします。

(渡辺)

ありがとうございました。それでは引き続き内山さん、お願いします。

(内山)

皆さんこんにちは。明治大学きずなInternationalに所属している内山結葉（うちやまゆいは）です。私が所属しているきずなInternationalは東日本大震災をきっかけとして発足したボランティアサークルです。私自身は東北に行ってみたくてという少し安易な理由から、このボランティアサークルに入りました。きずなInternationalは、拠点を宮城県の南三陸に置いて、農業支援や子どもたちへの学習支援を行ってきました。最近では、現地の復興が進んだことや、コロナ禍によって移動の制限がかかってしまったことにより、東京近郊でのボランティア活動を行っています。具体的には、千葉県での農業支援や、先ほど発表にあった世田谷区梅丘での学習支援や、神奈川県での海の浜辺のごみ拾いですとか、あとは少し東京から離れますけれど、新潟県上越市での中山間地域の山の整備などのボランティアを行っています。本日はよろしくお願ひします。

(渡辺)

ありがとうございました。それでは引き続き望月（もちづき）さんお願ひします。

(望月)

皆さんこんにちは。明治大学心身障害者福社会の望月です。しいの実では、先ほど紹介があったように、放課後、児童クラブにお邪魔して、子どもたちと交流をしたり、知的障害の方の作業のお手伝い、あとは電動車椅子サッカーのチームのサポート等を行っています。僕は小学校の方と、電動車椅子サッカーの方をメインで行っているという感じになります。僕がボランティアを始めたきっかけというのが、高校の時なんですけれども、僕の叔父が、社会福祉士で、僕がもともとサッカーをやっていたこともあって、その社会福祉士の叔父がCPサッカーって言う脳性麻痺の方のサッカーがあるんですけど、そのチームのサポートをしてみないかというので、誘われて行ったのがきっかけでした。それから大学に入るまで、その活動を続けていたりしたのもあって、しいの実の電動車椅子サッカーの活動だったり、あと子どもが好きっていうのもあったので、親和性があったことから、こうやって今活動しています。本日はよろしくお願ひします。

(渡辺)

ありがとうございました。それでは最後に山田さん、お願いします。

(山田)

今日はよろしく申し上げます。明治大学。3年の山田龍（やまだりゅう）と申します。ぱれっとというボランティアサークルに所属してまして、ぱれっとでは、環境系、国際支援、児童関連のボランティアをしております。私はそこで代表として誰もが気軽にできるといったモットーを持って、ボランティア活動を推し進めております。私がこの活動をしようと思ったきっかけや理由というのは、僕自身も何かボランティアを気軽に始めてみたくて、その中で、清掃系のごみ拾いなんかボランティアとして、取っかかりとして、やりやすいんじゃないかなと思ってまして、それをSNSで明治大学のサークルで探したところ、このサークルがヒットしましたので、このサークルに入りました。以上です。よろしく申し上げます。

(渡辺)

ありがとうございました。この8人のメンバーでパネルディスカッションを進めていきたいと思えます。それで、まず最初に私が思ったことなんですが、先ほどの各チームの活動報告、それから今回の自己紹介を通して、予想以上に様々な活動をされているんだなあということに感心をしました。これが、コロナがなければもっといろんなことができたんじゃないかなあという気もしまして少し残念な思いもあります。それで、今日はですね、ボランティア活動を通して、どういうふうなことを学んだかというのを前半の方のテーマに取り上げまして、後半の方のテーマとしては、そのボランティア活動を広げるために、どのようなことをすればいいのかという話を、パネリストの皆さんにしていきたいと思っております。それでは、まず最初にボランティア活動から学んだこととしまして、印象的だったこと、よかったこと、交流するにあたって気をつけていること、ボランティア活動の魅力、新しい価値の創出、この4つを挙げましたので、この中から2つくらい選んでいただいて、それぞれ、ボランティア活動から学んだことを話してもらえればと思います。それでは、田畑さんからお願いします。

(田畑)

ボランティア活動で印象的だったこと、よかったこととしては、私自身の話

になってしまうんですけれども、コミュニケーション能力が向上したことです。私自身普段からその緊張をかなりしたりとか、あるいは人と話す機会が、今まで中学、高校と、そんなになかったので、コミュニケーション能力としてはそんなに高くなかったんですね。ただ、やはり先ほども活動紹介のところで挙げましたけれども、献血推進の活動を3年間ずっと続けてきました。その中でやはり呼びかけをするときに、ただ呼びかけを、献血お願いしますって棒読みするだけだと通っている人に何も伝わらないので、例えば、その通る人の相手によって、声の大きさを変えたりだとか、あるいは話し方を変える、また、その献血の呼びかけをしている時に、道案内とか聞かれることもあるので、その周辺の地理を頭に入れておくなど、コミュニケーション能力を鍛える意味で、非常に役に立って、よかったですと思います。

魅力に関してですが、まずボランティア活動の魅力としては、自分の体一つで、道具とか必要な場合もありますけれども、道具とか必要なしに、役に立てることがあるかなと思います。また、様々な人に出会えることですね。先ほど活動発表でありましたように、今ENVO（エンボ）さんとともに活動している、オリーブルームという活動では普段関わることのない小学生の方とか、あるいは幼稚園生の方と出会えた。それで、私には兄弟とかがいなかったもので、なかなか小さい子と触れ合うという経験がなかったのですけれども、小学生の方とか、幼稚園の方と触れ合うことで、様々な人に出会えたというのが一番の魅力だったのかなと思います。以上です。

（渡辺）

ありがとうございました。コミュニケーション能力を、高めることができたとか、それから自分の体一つでボランティア活動ができるとか、そういった話をしていただきました。それでは、続いて山下さん、お願いします。

（山下）

私の方からは、ボランティア活動で気をつけていることと、新しい価値の創出ということについてお話しさせていただきたいと思います。気をつけていることについては、先ほどちょっと言ったんですけれども、青鳥特別支援学校さんのカフェのシールのデザインとか、メニューのデザインを考える活動では、コロナとか、あとは時間の都合で、直接の交流ができなくて、一緒にお話し合

いするとか、そういうこともできないので、そのような状況でもちゃんと相手の希望を組み込めるようなデザインを考えたかったので、デザインに使用するロゴがあるんですけども、その位置をバージョンを変えて、複数添付したりとか、あとはわざと空白を作って、生徒さんの作品で埋めてくださっても大丈夫ですっていうように、なるべく一緒に作ったりとか、相手に選択してもらえらるような仕組みを考えていることに気を付けています。

新しい価値の創出というところですけども、私は、大学生に入ってから、本当に初めてボランティアに参加したレベルの者ですけども、ボランティアというのが、自分が相手を支えるイメージがすごく強くて、でも何か実際に地域の子育て支援のボランティアに個人的に参加させていただいたことがあるんですけども、そのボランティア先の活動を間近で見させていただいた時に、そのオンラインとかでも、こういうことをやってるんだとか、自分よりも人生経験の豊富なボランティアの方々から多くのことを学んだりとか、あとは性格の面で言うと、本当に私、昔は店で注文するのも本当に苦手だったんですけども、そのボランティアを通じて、性別とか世代とか関係なく、多くの方とお話をする機会があって、すごい前よりも積極的に自分から話し掛けられるようになったなというのを実感しています。だから、そのボランティアっていうのが一方通行ということじゃなくて、何か自分にとっても新しい価値を見出せるようなことでもあるんだなというのが実際に活動してみて感じました。以上です。

(渡辺)

ありがとうございました。新しい価値を、見出しながら活動をしている。それと、青鳥特別支援学校の方でデザインの方のボランティアをされていて、そして一緒に作り上げるというところに力点を置いて活動されているというところが印象に残りました。それでは引き続きまして石田さん、よろしくお願ひします。

(石田)

まず、実際のボランティア活動を通して、非常に印象的だったことは、意外と活動していると、やっぱりそのボランティア活動ってどうなのみたいな、世の中にはそういう懐疑的な方が多いのかなって、自分はずっと思っていたんで

すけれど、意外と実際に触れ合ってみると、非常に協力的だったり、あとは何か私たちの活動の方針でアクセサリーの販売とかを行っているんですが、結構、興味を皆さん持っていただいて、こういう支援に繋がるんだとか、そういった反応をいただくことで、皆さん結構そういう、実際に支援はしたいなと思っ  
ていても、一体どういった支援をしていくのかみたいな、そういったことがわからないというか、ちょっと疑問に思っている方が多かったので、でも、それでも支援はしたいという何か心温かい人々がたくさんいるということを知れたのは、非常に印象的でよかったことでした。

そして、新しい価値を創出していくということですが、私たちのサラマットの活動というのは、やっぱり自分たちが勝手に支援するというわけじゃなくて、向こうの方々に必要なものをしっかり支援して、なおかつ、向こうの方々にも協力していただく。アクセサリーなどをこちらで日本の価格で、適正な価格で買い取って、やっていくということですが、これによって、双方の学びとか、そういうことだけじゃなくて、実際に価値あるものを生み出していけるということが、こちらのボランティア活動を通して、ただ単純に支援するだけではなくて、向こうの方々も、価値あるものをしっかり作り出していけるということ  
を、このボランティア活動で学ぶことができました。以上です。

(渡辺)

ありがとうございました。お互いにwin-winの関係というようなところでしょうかね。それにしてもいろんなことをされていますよね。この辺の発想というのは。どういったところから出てきたのか、ちょっとお話を聞かせていただいでよろしいですか。

(石田)

はい。わかりました。そうですね、私たちの活動というのが、もともと日本大学の福祉の部門で、フィリピンの小学生の支援を行っていたんですが、途中でちょっと撤退をすることになってしまって、自分たちでも、もう少し支援を続けていきたい。1人の小学生の方と非常に交流があったので、その方を実際に支援したいということで始まったのがきっかけですが、その過程で自分たち学生ができることは何だろうかとか、実際に交流していた学生の方々とコミュニケーションをとって、どういったことならできるよとか、実際に現地に行った

りして、コミュニケーションを図ることで、こういった創造の土台というか、活動の基盤というものを作り、少しずつ作り上げてきたという形になっています。

(渡辺)

ありがとうございました。それでは続きまして内山さん、お願いします。

(内山)

はい。私の方からは、ボランティア活動としてよかったと思ったことと、ボランティア活動の魅力の二つについて話したいと思います。私がボランティア活動をしてよかったと思ったことは、ボランティア活動で大学の授業だけでは得られない学びを得ることができたことです。これは先ほど渡辺先生がおっしゃっていた、個人の受容的な学びに当てはまると思うのですが、私が千葉県で農業ボランティアを行った際に、農家さんに手入れがされずに、荒れてしまった耕作放棄地を見学させていただきました。その時には、使用されなくなったビニールハウスの鉄骨がそのまま残っていたり、背の高い植物がそのまま生い茂っていたりして、その土地を畑として使用するためには数年かかるそうです。私は、大学でまちづくりについて学んでいるのですが、そうした土地の使用、耕作放棄地を直して使用するためには、数年かかるという実際の土地の状況について知ることができて、それが大学での学びに繋がったのが、とても良い経験だと思いました。

二つ目は、ボランティアの魅力についてです。私はボランティア活動の魅力は、人と人との交流にあると思います。私は今年の夏に新潟県の中山間地域でボランティアを行いました。中山間地域のボランティアというのは、山ですけど、中山間地域で高齢化が進んだ山の整備を行うボランティアです。私が参加した時には、地元のおじさんたちと、活動を行ったのですが、その土地の人々との話がとても楽しくて、その夏はすごく暑い日だったんですけど、とても楽しく活動することができました。このように場所や世代を超えて、様々な人と交流できることが、ボランティア活動の魅力だと思います。以上です。

(渡辺)

はい。ありがとうございました。実際のまちづくりを勉強されていて、それを生かしたボランティアというようなことを考えていらっしゃるようですね。

ど、具体的に勉強したことがボランティアで活かせたというような、何か事例とかありましたら、ちょっと聞かせてもらえますか。

(内山)

まだ、まちづくりについて詳しく学んでいる段階で、私は今2年生ですけど、まだまちづくりについて専門的に学んでいる状況ではないのですが、私は来年度から、食料経済学という学問を専門に勉強しますけれど、そこでは農業、農家さんたちとの繋がりもあるので、1年生の時に学び、農業ボランティアを通じた学びを来年度以降、大学での学びに生かすことができたらなと思っています。

(渡辺)

はい。ありがとうございます。学んだことをボランティア活動で生かせるということは非常にいいことだと思いますので、ぜひ学びを深めて、そしてボランティア活動に関しても深めていただければというふうに思います。それでは望月さん、お願いします。

(望月)

はい。僕の方からは、印象的だったことを話したいと思いますが、障害者サッカーというのは、例えば、耳が聞こえない方はデフサッカー、さっき僕がきっかけになった脳性麻痺の方はCPサッカー、あとは、目が見えない方はブラインドサッカーだったり、手足の切断はアンプティサッカーというふうに7種類、それぞれ別々で障害に応じて、ルールがあるサッカーがあるんですけども、これが数年前は障害者サッカー同士の横の繋がりが薄くて、それぞれ日本代表のチームとかがあるんですけども、それが代表のユニフォームが全部バラバラだったりという状況だったんですね。その当時、横の繋がりを作りたいなというのがあって、7種の障害者サッカー全員が同じ一つのコートでサッカーをやってみたら、どうだろうという企画を運営したことがあるんですけども、電動車椅子サッカーのボールというのが結構、このぐらい、普通のサッカーよりも全然大きいボールなんですね。せっかくならそれを使ってやろうじゃないかというのがあって、それでやっていたんですけども、それをやると、ブラインドサッカー、目が見えない方は、普段使っているボールが音が鳴るボールなんですね。それが電動車椅子のボールだと音が鳴らないので、場所がわからないという話になっちゃったんです。そこでちょっと僕、即席で、大きいビニー

ル袋を買ってきて、それに入れて、ビニールの音が鳴るようにしたのですけれど、そのボールをビニール袋に入れるという一つの行動だけで、その場にいる全員が一つに繋がり、ボール一つで繋がれたというのがあって、そういうので、人との繋がりというのを感じられたのが、すごく印象的だったし、それが何かボランティアの魅力なのかなというふうに思いました。

(渡辺)

はい。ありがとうございます。とても興味深く聞かせてもらいました。7つの障害者サッカーを一つにして活動したということで、ちょっと私も発想が及ばなかったんですけど、個々のサッカーは、私の方も見たことあるのですが、電動車椅子のサッカーというのは激しいんですよ。場合によってはもう本当に車椅子から落ちても、それでもまた立ち上がってみたいな形で、本当にこの人たち障害持っているのかなと思うような、そういう人たちもね、結構多いんですけど、非常に様々な活動をされているなという印象を持ちまして、ありがとうございます。それでは山田さん、お願いします。

(山田)

はい。僕の方からは、ボランティア活動を通して印象的だったことと、新しい価値の創出について話させていただきます。まず、印象的だったことについて、これは、自分がボランティアをした後に、印象的だったことなのですが、ボランティアを始めてみると、意外にも自分の生活の多くの場でボランティアというものを目にするということを感じました。例えば、大学や駅前、市役所とかの掲示板のポスターで周知している、ちらしを見かけたり、他にも観光地とかで、ごみ拾いをしている方々がいたり、また、インターネットで探そうと思えば、本当に様々なジャンルのボランティアが見つかるみたいな感じで、自分の周りには、そのボランティアをやっている人がほとんどいなかったんで、自分がやってみて、こんなにも自分の身の回りにボランティアというものが、何か根づいているのかなと思いました。それが印象的なことですね。

新しい価値の創出というところで、ちょっと抽象的な話になってしまうんですけど、ボランティアというものは、個人の社会規範を改善するという価値があると思いましたがね。例えば、僕らのごみ拾いやることによって、自分がごみを拾う側になることで、そのポイ捨てというものがどれだけ他の人や町に迷

惑がかかるのかとか、他にはエコキャップ回収活動をやってみることで、エコキャップ回収の目的ってというのが、発展途上国のワクチンのためというのが分かって、分かるとペットボトルとキャップを分別する人がかなり増えるんですよ。また、対人のボランティアでは、実際に関わることによって、様々な立場の人の気持ちが分かったりするので、だから、より多くのボランティアをみんながどんどんやることによって、思いやりのある、社会規範が高い社会になると思っているので、学校等でどんどんボランティアというのは取り入れるべきだなと思いました。以上です。

(渡辺)

はい。ありがとうございます。社会批判の解消に繋がるという、面白いと言ったら、失礼なんですけど。

(山田)

社会批判ではなくて、社会規範です。

(渡辺)

すみません。規範ですね。はい。社会規範の解消。すみません、私の方の聞き間違いでした。はい。ありがとうございます。それでは、あとお二方、大高さん、お願いします。

(大高)

はい。私からは、交流に当たり、気をつけていることと、ボランティア活動の魅力について、話したいと思います。まず、気をつけていることですが、私たちは、せたがやASOBO（アソボ）という世田谷区の子どもと交流をするイベントがあるんですけれども、そこで、子どもと同じ目線で物事をとらえて、一緒に活動を楽しむことを、すごく気をつけています。同じ目線で物事をとらえることによって、イベントの準備などで、子どもがどうしたら喜んでもらえるか、楽しんでもくれるか考えやすくなるきっかけにもなりますし、子どもがイベントを通して、楽しくなかったと言われないように、準備をしています。子ども同士で喧嘩になってしまうきっかけを防ぐこともできますし。例えば、私たちはスライム等の工作なども行っているんですけれども、子どもが作ったスライムの大きさがそれぞれ違うと、子どもたちがけんかになってしまうので、それを防ぐために、あらかじめ材料等を同じにしたり、結果的に子どもが楽し

めなかったということがないように、同じ目線で、物事をとらえるということ  
は本当に活動するにあたって、とても気をつけています。

ボランティア活動の魅力についてですけれども、どのボランティア活動でも  
当てはまると思うのですが、ボランティアはとても貴重な体験をすることがで  
きるの、そこが一番の魅力なのかなとすごい感じています。私たち児童教育  
研究会では、せたがやASOBO（アソボ）というイベントで子どもたちと関わるイ  
ベントで、子どもたちとの距離感を学ぶ貴重な体験をしています。部員の中  
でも教員をめざす方がとても多いのもあって、せたがやASOBO（アソボ）を通  
して、すごく子どもとの接し方を体験しています。普段の生活では、学べないこ  
とや、そういうイベントを通して、貴重な体験ができるというのが、とても利  
点なのかなと思います。そうですね。このように何かボランティア活動はとて  
も貴重な体験ができるので、そこがボランティア活動の魅力の一つなのかな  
と、すごく感じています。以上です。

（渡辺）

ありがとうございました。子どもと同じ目線に立つということは活動をして  
いく上においても非常に大切なことだというふうに私も感じています。はい。  
それでは伊藤さん、最後になりますが、お願いします。

（伊藤）

私からも、交流するにあたり、気を付けていることと、ボランティア活動の  
魅力についてお話ししたいと思っています。まず、交流をするにあたって、気  
を付けていることとして、ボランティアを行う際に、そのボランティアの担当  
者とメールのやりとりや、電話のやりとりを行うのですが、その時に失礼のな  
いような対応を心がけています。ここで失礼な対応をしてしまうと、相手の方  
にとっても、この人で大丈夫かなあ～、この人と活動したくないなあ～とい  
う思いをさせてしまう恐れがあると考えているので、しっかり礼儀と感謝、ボ  
ランティアをさせていただく感謝の気持ちを忘れずに、電話対応や、メール  
対応を行っています。私たちのサークルは幅広い年代の人と関わり合いをして  
おり、高齢者だったり、子どもだったり、そういった人と関わっていく上で、  
起こる問題というのが、年齢層が幅広いので、時代の常識、例えば、昔の  
人はこういうことは普通に発言しても問題なかったけど、今の時代にこ  
ういう発言をする

と、すごい問題視される、例えば女性の考え方だったりなど、そういった問題になるような言葉を使わないように心掛けています。完璧に全く失礼のない対応は不可能であると思っているので、ただ、感謝と礼儀の良さというのを心がけて、対応しているようにしています。

ボランティア活動の魅力ですが、そういった感謝と、礼儀正しさを意識していると、例えば、私は伊藤というのですが、伊藤君と、活動できてよかったわという、高齢者の方から感謝の言葉をいただいたり、子どもからは、伊藤さん楽しかったよ、みたいな直接、感謝されることがすごい心に響いて、ボランティアやってよかったなという気持ちになるので、そういった直接的な感謝をもらえるのが、ボランティア活動の魅力かなと私自身感じております。以上です。

(渡辺)

はい。ありがとうございました。学生の皆さん、ボランティア活動をさせていただいているのですが、ボランティア活動先にとっては、非常に貴重な時間を提供されているということを考えながら、活動の方を進めていただければというふうに思います。伊藤さんの今言った失礼のないようにというのが、よく的を得ているというふうに思ったりはしました。はい。それでは次にですね、ボランティア活動を広げるためにということで、話をしていきたいと思います。4つのポイントとしては、友達への働きかけ、そしてコロナ禍での工夫、そして、人の確保、ちょっと友人との働きかけとかぶるところもありますけれど、一緒になっても大丈夫です。それからあとは資金の調達。この辺りのところの話をいただければというふうに思います。それでは、石田さんからお願いします。

(石田)

人の確保、資金の調達についてお話しさせていただきます。まず、私たちサラマットでは、特にコロナ禍でイベントとかが中止になってしまったこともあって、とにかく人手が足りないので、新しく、学内での広報やポスター等の広報以外に、ツイッターやインスタグラム、フェイスブックなどのSNSなどを使って宣伝を行っています。それに加えて、今、いろんな方々が、いろんな価値観、最初に渡辺先生がおっしゃっていただいたように、いろんなことを目的として、ボランティアサークルに入って、来ていただいているんですが、いろんな目的

を持った方が、それぞれその目的を果たせるような組織づくりというか、イベントや企画などをしっかり行って、集めて、なおかつ、その人たちがしっかりと、サークルに参加していただく、定着していただけるように、私たちは活動しています。

資金の調達についてですが、私たちはとにかく奨学金の支援等を行っているので、普段の活動以外に、いろいろ営利的というか、何ていうか商売みたいなことをやっていたりするのですが、とにかくコツコツといろいろなイベントごとには出席して、少しずつでもいいから、いつも来てもらっている方に、きちんとその自分たちの活動を知ってもらって、なおかつ、その協力していただくということで、日々コツコツ活動することで、資金の調達を行っています。以上です。

(渡辺)

はい。ありがとうございました。人手の確保、今非常に大変なことと、あと、それから感心したのが、資金の調達ですけど、こちらを自分たちで資金を調達してるというところが非常に素晴らしいなと思って話を聞かせていただきました。それでは内山さん、お願いします。

(内山)

はい。私の方からはコロナ禍の工夫と資金についての二つの点からお話をさせていただきます。まず、コロナ禍の工夫についてですが、コロナ禍の工夫は二つあります。一つ目は、活動拠点を東京近郊に移したことです。先ほど言ったとおり、きずなInternationalは宮城県の南三陸を拠点に活動していたのですが、コロナの移動の制限によって、現地に行くことが難しくなったので、活動場所を東京近郊に移しました。活動場所が変わっても、自分たちができる範囲で活動を続けていくことが大切なのではないかと思っています。工夫の二つ目は、サークル内でのミーティングをZoom等のオンライン上で行ったことです。対面でサークルのメンバーに会うのが難しくなってしまったので、Zoomを使用してミーティングを行いました。その結果、いつでも好きな場所でミーティングを行うことができたのですが、やっぱり対面で友達と話す方がミーティングもスムーズに進むし、メンバーとの仲も深まるなあ～と感じています。

二つ目に資金の調達についてですが、資金の調達に関しては、きずな

Internationalは毎年部員から年会費1,000円をもらっています。きずなはボランティア自体にお金をかけるということがあまりないのですが、いただいたお金は、ボランティアサークルメンバーのボランティア保険の加入資金にしたり、あとは、大学の文化祭での企画の資金に充てたりしています。以上です。

(渡辺)

ありがとうございました。はい。コロナ禍になって非常に大変なこともあったかと思うんですけど、その中でいろんなことを、またされているなというふうに思いました。それでは次に、望月さん、お願いします。

(望月)

はい。ボランティア活動を広げるためにということですが、まずは何より活動を知ってもらおうというのが大事かなというふうに思っていて、各団体さんの先ほどの紹介の時にもありましたように、インスタグラムとか、フェイスブック、ツイッターとかのSNSの活用はすごく有用だろうなというふうに思います。あと、意外と個人的に思っているのですけれども、ボランティアの活動をしてみたいなと思っている人って意外といえると思うんです。だけど、どうしたらボランティアに参加できるのだろうっていうところで、つまりいちゃっている人が意外といえるのかなというふうに思うので、そういうのを僕達だったり、ボランティアやっている人が個別に誘ってみるのも一つ手ではあるのかなというふうに思います。それからボランティア活動をしていくにあたって、やっぱり交通費だったり、ボランティア保険とか、お金がかかってくる部分があると思うので、そういうのは、しいの実としては、大学の方で5回とか、助成金が出ているところがあるので、そういうところで申請して助成金をいただいたりとか、あとは、しいの実ではやってはいないことですがけれども、大企業さんの方で、社会福祉事業に対して助成をしているというところもあるので、そういうところに申請してみたりとか、あとはボランティア活動している学生さんを支援してくれるというNPOの団体さんがあるので、そういうところと協力してやると、ボランティアの活動の幅も広がるのではないかなというふうに思います。

(渡辺)

ありがとうございました。助成金とか、いろいろあって、それを活用はしたいんですけど、なかなか通らなかつたり、採用できない、してもらえなかつ

たりということが、あるかと思うのですが、ぜひ、会場の皆様で資金の調達と  
いますか、ご協力いただける方がいましたら、ぜひお願いしたいなというふ  
うに思います。それでは山田さん、お願いします。

(山田)

はい。僕の方からは、コロナ禍での工夫と人員の確保について、お話しさせ  
ていただきます。まず、コロナ禍での工夫は、やはりオンライン活動ですね。  
オンライン、Zoomを通して、先ほど活動発表の時も、伝えたのですが、児童館  
の子どもたちに環境に関するかるた作りだったり、サークル員同士の環境クイ  
ズだったり、そういうレクリエーションなどを行っておりました。でも、やっ  
ぱり対面の活動にはちょっと及ばないところもあるので、ごみ拾いや、エコキ  
ャップが比較的早い段階で、制限が許可、活動が許可されたので、その活動  
維持をメインとして取り組んできました。

そして、人員の確保については、主に新入生歓迎会や、ツイッターなどのSNS  
アカウントで募集を呼びかけているんですけども、大学のボランティアセン  
ターさんの方々ともちょっと懇意にさせていただいているので、そちらで一般の  
学生の方に、僕らの活動を紹介していただいたりして、それ経由で僕らの活動  
に参加する人もいますね。また、他サークルとの共同企画などでは、お互いの  
シフトをお互いのサークル員同士が補い合って協力したりしました。また、宣  
伝や募集の際には、僕らは気軽にボランティアができるということを常に意識  
して呼びかけています。それが人員の確保ですね。以上です。

(渡辺)

はい。ありがとうございました。コロナで、様々な支援というのもあります  
けれど、その中で学生の皆さん本当にいろいろ工夫をされて、いろんな活動を  
されているなど、その発想力、やはり素晴らしいなと思って、話を聞かせてい  
ただきました。あとは、やはり人員の確保ということで、なかなか苦勞されて  
いるなという、そういうふうな印象を持ちました。それでは大高さん。お願い  
します。

(大高)

はい。私からは、コロナ禍での工夫と、あと資金の調達についてお話しさせ  
ていただきます。まず、コロナ禍での工夫についてですが、私たちは子どもと

触れ合う機会、イベントがあるので、そこでのコロナ対策をしています。コロナ対策としては、基本的な手の消毒だとか、手洗い、うがいを基本的に徹底していて、あと、私たちもそうですけれども、子どもたちにも極力、何かない限りは、マスク着用を協力してもらっています。特にイベントの休憩時間では、手洗い、うがいを極力、協力してもらって、あと換気などもしています。そういうところで、基本的なコロナ対策を行って、感染しないように心がけています。

次に、資金の調達についてですけれども、部員が今11人いるんですけれども、そこから部費としてお金をみんなで出し合って、それを1年間の部費として、活動をやりくりしております。それでも足りなかった場合は、また、部員からお金を徴収して賄っています。あとは楓門祭という国士舘大学の文化祭がありますが、そこで、今年はチョコバナナを販売して、そこから出た利益を部費として充てて、資金を調達しています。以上です。

(渡辺)

はい。ありがとうございます。文化祭でチョコバナナを販売して、その利益を部費に充てているというようなことを言ってもらいました。それでは伊藤さん、お願いします。

(伊藤)

はい。私からは、友人への働きかけと、コロナ禍での工夫についてお話しします。まず、友人への働きかけですが、私たちのサークルって、人数が200人ほどいる大きなサークルでして、ただその中でも、コロナ禍だったり、実際どんな活動してんだろうとかという不安を持っている人が多く、1回に活動する人数が10人にも満たないことが多々ありまして、多くの人に、ボランティアに参加してくれるための工夫はないだろうかということを考えたときに、ボランティアの内容も大切なのですが、実際どんな人がボランティアに参加するかということも大事だと考えておりまして、例えば、仲の良い人が多かったら、参加しやすいのかなって思っておりまして、どうしたら、例えば、仲の良い人で集まってもらおうと考えたときに、友人同士の声掛けによって人数を集めたら、いいんじゃないかということを思いつきまして、その際に人数が多く集まったのが、先ほど発表でもあった、オータムフェスティバルという学園祭の企画なのです

が、そこで友達同士に声をかけてもらったりした結果、多くの人数、それが30人、40人ぐらい、結構集まりまして、友人への働きかけとして、友達同士に誘ってもらうのがいいなと感じました。

コロナ禍での工夫についてですが、コロナ禍で、ボランティアは大きく影響を受けたのですが、大幅に制限を受けた中でも、どう活動していくかについて考えたときに、例えば、高齢者の方だと、感染リスクをすごい心配する方が多くて、いやもう本当にしっかり感染対策を徹底していく必要があります。どんな工夫をしたかと言いますと、アルコール消毒を、まず徹底すること。マスク着用も絶対にしまして、あと2週間前から体調管理として、体温を測ったりとか、外出したのかとかというチェック項目を入力してもらうことによって、高齢者の方々に安心してもらうように工夫したところ、スマホ講座だったり、そういった対面での活動を再開することができたので、コロナ禍での工夫としては、2週間前からの徹底した体調管理とマスクの着用、徹底した消毒が、いいなと思った工夫です。以上です。

(渡辺)

ありがとうございました。コロナ禍の対策ということと、それからあと、人集めのところで、友人への呼びかけという話をしてもらいました。SNSで呼びかけてもなかなか見てもらえないですね。それが友達を誘って実際に行くというようなことになると、意外と人が集まるのかなというふうに思いながら聞かせてもらいました。それでは田畑さん、お願いします。

(田畑)

はい。私からはコロナ禍での工夫と人の確保についてお話します。まず、コロナ禍の工夫ですが、これに関しては他のサークルさんと同じようにオンラインの活動をして、いわゆる活動自体を止めないということを行いました。また、私たちのサークルはその他の学生赤十字奉仕団と交流しているんですけども、その交流会も対面ではなくて、オンラインで行うことで顔見知りを作っておく。そのような形で、今年から対面に戻したのですが、スムーズに交流ができたということが挙げられます。

また、人の確保についてですが、これも他のサークルさんとやっぱ重なってしまうんですけども、SNSを軸に行いました。オンラインですとZoomのスクリ

ーンショットの機能を使って行うことで、活動の様子を公開して、そのボランティアに参加してみたいと思う人の目につくように心がけました。

また、人の確保については新規の人の確保もそうなんですけれども、やはりそのサークル内での人の確保というのも、やっぱり、課題の一つでして、それに関してはサークル全体のライングループのお知らせだと、見ない人がいるというのがわかったので、一人一人団員に個別にラインを送って、目につく回数をふやすことで、活動に参加してもら回数を多くしたというのは、私たちの人の確保の仕方としてありました。以上です。

(渡辺)

はい。ありがとうございます。やはり、SNSをうまく活用されているということで、先ほどとちょっと話が違って来るんですけれども、やっぱり若い世代かなというふうにちょっと思ったりはしました。それでは山下さんお願いします。

(山下)

はい。私の方からは友人への働きかけと人員の確保についてお話しさせていただきたいと思います。友人への働きかけというのは、学校とかでも、ボランティアの募集情報というのがすごく多くて、ボランティアを始めたいって思ったら、個人とかでももちろん行きますし、相談もできるんですけれども、やっぱり、1人で知らない環境に飛び込むというのがすごい勇気がいるので、紹介をされても行きにくいって感じる人とかがすごく多いと思っています。でも、その中でも知り合いとか、仲の良い人とかと一緒になら、その行きやすさが増すと思うので、私は個人でボランティアの誘いがあった時に、直接友人とかと一緒にいかないとか言って、声をかけたりしていて、それで誘った人がそのボランティア先で、いい刺激となるようなことがあったりとか、あとはそれをもとに、ボランティアの方々と連絡先とかを交換して、繋がったりするといいなって思っています。

人員の確保については、ENVO（エンボ）の中でも結構大きな問題になっていて、実際に活動するとなつて、団体の中で呼びかけても、全然人が集まらないというのがすごく多くて、やっぱりコロナの影響もあると思うんですけれども、全然活動ができていなかったのので、急に呼びかけても楽しさがわからないとか、その集まりづらいつとか、あとは知り合いがいなから、とかそういういろいろ

な理由があると思うので、今はランチ会とか、クリスマス会とかのイベントを企画して、まずは団体内で交流をしてもらっていて、そこで集まるのが楽しいと思ってくれたら、すごい嬉しいですし、この間のイベントが楽しかったから行ってみようかなとか、あとは知り合いが増えたから行きやすくなったとかを感じてもらえたらいいなと思って、今、意識して活動しています。それでまた、いざ活動があったときに集まる動機が増えたりとか、少しでも活動に行きやすくなればいいなと思っています。以上です。

(渡辺)

ありがとうございました。いくつかの団体の中でもお話しが出ましたけれど、サークル内での活動者を確保するということが、非常に難しいところがあるというようなことですね。はい。すみません、ちょっと私の方の時間配分がまずかったせいで、観客へのメッセージということが、省略ということになってしまいました。本当にすみません。何か言い足りなかったこと、それから会場にお越しいただいた方へのメッセージなど、もしかしたら言いたいことがあったかもしれませんが、今回は申し訳ありませんが、カットさせていただきます。

それで、まとめの方に移りたいと思いますが、今、私がコメントしながら返していきましたので、その辺をまとめとして、考えていただければというふうに思います。ボランティア活動から学んできたことということで、そのの学んできたところから新しい発想、先ほどの7種目の障害者のサッカーを1つにしてというような、非常に大学生ならではのユニークな発想といいますか、それからボールに対する工夫とか、そういった活動がいろいろそれぞれ工夫されて行っているのだなというふうに思いました。それからボランティア活動を広げるためにということで、やはり人員の確保というのが大変かなというところ、それから資金の調達も大変かなというところを聞くことができました。あと、コロナ禍においては、コロナ禍なりにいろいろ学生の皆さんが工夫されて活動されているなというふうな印象を持ちました。

それから最後になりますが、問われる、提案する力ということで、今回、皆さんがボランティア活動をいろいろ発表してもらったのですが、こういった内容ということが、就活なんかにも繋がってくるというふうに思うんですね。学生時代にどんなボランティア活動をしたことがありますかということに、皆さ

んは多分スラスラと答えられると思います。それはどんな活動だったのか紹介してくれますか、こちらの方もササッと回答できると思います。その活動からどんなことを学びましたか。その活動を通して社会に提案したいことは何ですか。そのあたりを少し深掘りしていってもらえればと思います。そして、活動で経験したことを誰に伝えて分かち合いたいかというようなことと、それからその活動をこれからの仕事にどのように生かしていきたいですかとか、私の会社の社会貢献活動に提案したいことはありますか、みたいな、そういった質問もあるかもしれませんが、ぜひ皆さんのボランティア活動で得たことを生かして、これからいろんなことがあるかと思いますが、乗り越えていってもらえればというふうに思います。ちょっとまとまりのないまとめ方になってしまいましたが、それでは、以上で、パネルディスカッションの方を終了させていただきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。皆様ありがとうございました。

(若田部)

渡辺様、パネリストの皆様ありがとうございました。学生の皆さん、様々な活動に参加されて、一人一人異なる学びをされているのが印象的でした。本日のボランティアフォーラムも、ぜひ出会いの場の一つにさせていただけると幸いに思います。

これにて、令和4年度せたがや学生ボランティアフォーラムを終了いたします。本日はお越しいただきありがとうございました。お忘れ物などなさいませんように、お気を付けてお帰りください。